小山地区医師会誌　2019・春号

令和元年5月15日

小山地区医師会誌

小山市・下野市・上三川町・野木町

OYAMA
SHIMOTSUKE
KAMINOKAWA
NOGI

2019
春号

第17巻1号　通巻 No.33　令和元年5月15日（2019年）
小山地区医師会（小山市・下野市・上三川町・野木町）
栃木県小山市神鳥谷2251-7　TEL0285-38-6781／FAX0285-38-6782
編集　小山地区医師会会誌編集委員会

平成最後の春がきた

下野市　田中　昌宏

写真1

日本各地の桜便りが連日4K画像で放映され、その鮮明な美しさには驚嘆させられますが些か食傷気味でもあります。満開の桜を愛でれば豪華絢爛、華やかさにただただ眼を見張るばかりです。小金井中央病院西側の公園の桜も満開になり御当地にも春が訪れました（写真1）。心地良い微風（そよかぜ）、優しい陽射し、そして明るい空の開放感は観る人を優雅な気分に誘ってくれます。清々しい空気を胸一杯に吸いこみ背伸びの一つもすれば爽快なことこの上もありません。束の間とはいえ命の洗濯になります。多くの日本人に桜は愛されています。その一人、江戸中期の国学者、医師でもある本居宣長（もとおりのりなが）は桜に憑かれた特別に桜好きな方です。古事記全巻を繙（ひもと）いて註釈書、古事記伝を書いたことは有名です。伊勢松坂の住人で生涯のうち桜にまつわる詩歌や書物は実に200～300編に及ぶとされます。自身の死後の墓の設計を指図し墓の周囲に植える桜の苗木の大きさやその位置までも言及しています。文芸評論家、小林秀雄は本居宣長（上・下）を著して古事記伝と本居宣長を分析して評価を加えていますが、その内容は非常に難解で私の理解力をはるかに超えています。上巻の途中で放り出す羽目になりました。遠い大学受験の浪人時代、現代国語の長文読解に小林秀雄氏の難解な評論文が多数出題され、現代国語を疎ましく思ったものです。そのトラウマが再び私の身に蘇りました。さて「敷島の大和心をひと問わば朝日に匂う山櫻花」は本居宣長の詠んだ歌です。意味は「日本人の心とはどのようなものですかと他人に尋ねられれば、それは朝日に照り映える山桜の花のように美しい」ということです。最近では百田尚樹の小説「永遠の零」の中で太平洋戦争末期の沖縄戦の特攻隊名にも冠されたと紹介されました。お国のために尊い命をささげた御霊の美しさを称えているのでしょう。

また近いところでは2018年、95歳で天寿を全うし栃木県旧国分寺町長を5期務めた故若林英二氏も非常に桜を愛した方でした。町長時代には天平の丘公園（尼寺公園）の整備に

情熱を傾け、日本三大桜の根尾谷淡墨桜（子桜。母桜は1400年の古木）、三春滝桜（孫桜）、山高神代桜（江戸彼岸桜、樹齢2000年）や盛岡石割桜（孫桜）の子孫樹をはじめ350本を超える八重桜を植え付けて地元住民をはじめ、訪れる客人達を喜ばせています。公職を退いた後の活動も含めて、まさに国分寺町に此の人在りといえる足跡を残した方でした。また、この界隈では筆の立つ、筆の進みも滑らかな御仁としても評判の人でした。零細な一町長の悲哀を著した「土曜はだめよ日曜もだめよ」（旧自治省発行の「自治」なる全国市町村機関紙に掲載された）を400字詰め原稿用紙で8枚を入院中の2－3時間の間に仕上げて回診で訪れる私を待ち構え、査読を依頼されたことがありました。銀座の老舗の原稿用紙にブルーブラックのインクで綴られ、愛用の万年筆が十分に腕を振いインクが香る手練（てだれ）なものでした。「零細な首長を余り扱（こき）使うと命が縮みます。住民の皆様、お願い！土曜日は扱使わないで、日曜日もね」という内容でしたが、1960年当時のギリシャ映画の「日曜はだめ　Never on Sunday」を捩（もじ）ったことは想像に易く、流石に機知にとむ洒落た親爺さんでした。その博識にも驚かされたのを覚えています（勝手な推測ながら、当時、田舎の栃木県では上映されなかったに違いないのです）。中学生の私は東京池袋東口の映画館で西部劇を観にいき、英語の授業でneverという単語を習ったばかりの頃で館内の掲示ポスターの「日曜はだめ」のNeverが強く印象に残り、たまたま覚えていたのでした。「美しき日本乃四季」（若林英二著）の第九節さくら（1999年3月）の項には福島県勿来海岸近くの小高い丘には源義家のクラ掛けの松という赤松がある。義家はそこに駒をつないで、「吹く風を勿来の関と思えども道も狭に散る山ざくらかな」と都から遠く離れた地で桜を詠んだと記しています。圧巻は西行の「願わくは花の下にて春死なむその如月の望月のころ」を紹介しています。意味は「願うことなら、二月の満月の頃、満開の桜の下で死にたい」という意味です。そして西行は満月と爛漫の花の時期、建久9年（1150年）旧二月十六日に、願い通り、この世を辞したと伝えられています。昔の人は風流ですね。日本人の精神を語る上で切っても切り離せない桜、桜をこよなく愛した人々のお話でした。

開院以来、この30年の間、月初めには欠かさずに朝礼を実施して参りました。この日は通常より15分早い午前8時15分に始業の挨拶を始め職員諸君を前に必要事項の伝達や重要な医療関連ニュースなどを易しく解説して情報共有に努めます。また簡単な講話もいたします。勤務の関係で朝礼には全体の半数位しか出席できませんが、100人超の多職種の職員が顔と顔を合わせて（face to face）、コミュニケーションを確かめ合うことは連帯感を高めるうえで貴重なことです。会場は通所リハビリのワンフロアー全てを使用します。その壁面には通所中の高齢者とスタッフの合作である色とりどりのぬり絵や切絵がところ狭しと飾り付けられています。2月は春の訪れを喜ぶ春告鳥（ウグイス）と開花した梅の図柄でした。3月は桃の節句、雛壇飾りです。4月は満開の桜といったように月ごとにテーマは変わります。毎月の作品は何れも出色の出来映えで協働作業の努力の集積が随所に輝

いています。四季折々の風情の移ろいや歳時記に合わせ長閑(のどか)な時間に身を委ね、時には、精魂をこめて仲間と共同作業をすることで減退気味の肉体に精気が吹き込み元気を取り戻すこともあるでしょう。子供の時の懐かしい思い出や遠い記憶が仄々(ほのぼの)と蘇ってくることもあるでしょう。朝礼は今までに359回を数えますが御代が令和に変わろうとも病院があり続ける限りは絶やすことなく次代の理事長には強い意志で続けてもらいたいものです。

先ほど桜の話をしましたが、そもそも、その昔から花と言えば、まずは梅の花です。古(いにしえ)の人々は梅を春告草ともいい春の到来の象徴でした。我が家の庭先の紅梅も咲きました（写真2、3）。山形県民謡の真室川(まむろがわ)音頭にも男の鶯が女の梅に通うといった具合に唄われています。古くから梅も多くの日本人に愛されていますが、中でも菅原道真公は余りにも有名ですね。学問の神様、習字の神様、天神様、天満宮に祭られた神様として国民に広く知れ渡っています。一方、晩年は大宰府で失意のうちに、この世を去り、日本三大怨霊の一人にも数えられ怖い話も数多く残っています。5歳の頃、幼名を阿古(あこ)といい「梅の花紅の花にも似たるかな阿呼が頬にもつけたくぞある」と詠まれ、幼いころから才覚の片鱗を覗かせています。菅原道真は類い稀なる能力の持ち主で天皇の篤い信認をえて立身出世を果たしますが、それを僻(ひが)む勢力の讒言(ざんげん)により右大臣の地位を追われ九州太宰府に左遷を命じられます。京を離れる際に屋敷内の梅の木に、「東風吹かば匂ひおこせよ梅の花主なしとて春な忘れそ」と詠んで別れを惜しんだことは余りに有名です。左遷から、わずか3年後には享年59歳で失意のうちにこの世を去っています。梅の花を抜きにしては語ることが出来ない道真は生涯にわたり梅を愛しました。2009年秋、私は仕事の息抜きも兼ねて日本消化器病学会に参加するために福岡に向かいました。前夜の東京は台風が上陸して各地で風水害が発生しました。友人と赤坂界隈で酒を呑んでいましたが、激しい風雨は一向に止む気配もなく赤坂山王下の交差点（溜池交差点の西側）は広範囲に水没して大きな湖沼が出現したかのような有様を呈しました。車の通行は完全に遮断され、タクシーは反対方向に向かって一斉に逃げ去りました。江戸時代から赤坂界隈は坂の多いところだそうで、その上、標高も低く大量の雨水が一気に流入する地形という

写真2

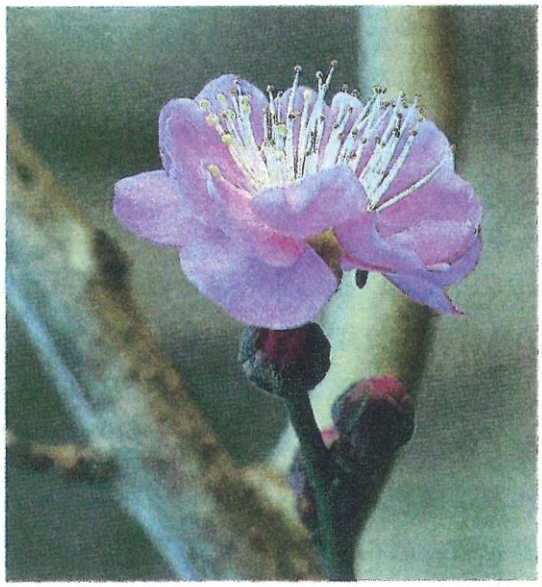

写真3

ことです。首相官邸からもそう遠くはない東京都心のど真ん中が台風の通過位で通行止めとは先進国のインフラ整備としては誠にお粗末といわざるをえません。オリンピック、パラリンピックの開催を2020年に控え、真夏の豪雨の効果的な雨水・排水対策は進んでいるのでしょうか。湖沼の雨水が交差点から消え去るまでには、およそ2時間以上も要しました。ホテルで眠りに就いたのは午前3時を回っていました。翌朝の羽田発の福岡便は台風の影響で飛ぶべき旅客機が完全に不足して全ての便がキャンセルとなりました。早朝の新幹線に白河夜船（しらかわよふね）を決め込んで乗り込み、夕方には福岡に辿り着いたのでした。翌朝、学会の受付をいち早く済ませ、すぐに学会場を後にして市内の目的地に直進しました。幸いにも天気は晴れて空気は澄みわたり屋外の散策や名所探訪にはピッタリの朝でした。

福岡市内の繁華街、西鉄のターミナル駅近く天神に水鏡（すいきょう）神社がこぢんまりと佇んでいました。そうです、この神社こそが私が福岡を訪れた最大の目的なのです。九州に上陸した菅原道真は、川面に自分の姿を映し頭髪の乱れや顔の汚れを整えましたが、ひどく変わり果てた己の姿を見て悲しみを一層深くしたとも伝えられています。左遷後も左大臣藤原時平一派に執拗に刺客を向けられ、恐怖に苛（さいな）まされる日々であったと記録されています。権力闘争に敗れた人の末路は後の時代の崇徳天皇の例をみても悲惨を極めるものです。その水面（水鏡）に建てられた社殿が現在は水鏡神社と呼ばれ市民や訪問客に親しまれているのです。道真公を祭神とする天満宮でもあります。南北の鳥居の扁額（へんがく）には「天満宮」の書が刻まれています。そして日清戦争勝利の祝賀で建立された石碑「水鏡神社」の揮毫も残されています。これらの書を直接、自分の眼で鑑賞するために福岡にやってきたのです。北の鳥居の天満宮は能書家として多くの書を残している侯爵黒田長成（黒田藩13代目当主）による古風な篆書（てんしょ）です。この篆書とは始皇帝が命じて秦時代の公式文字になったといわれる漢字の一書体です。佐賀県で2019年夏に開かれる全国高校総合文化祭の書道部門の栃木県代表は優秀賞の4人が選ばれました。そのうちの一人、高校3年女子は1年生から篆書の基礎を積み重ね「3年間の集大成にしたい。一枚70文字に5時間をかけて枚数を重ねた。心が乱れないように・・・、神経をとがらせたのは・・・。難度の高い趙之謙（ちょうしけん）（書家）を目標に書きこみたい」との意気込みが下野新聞に報じられていました。高校生の全国大会レベルにおいても真剣の刃渡りを長時間、心を乱さない静謐な時の刻みの中で集中することが求められるのです。まさに修行を思い浮かべさせるような気が遠くなるような忍耐ですね。技術の稽古だけでは到達が困難で心の乱れを忘れさせる鍛錬とも向き合うことが不可欠といえそうです。さらなる高みを目指す本質は書道も武道と変わらないのですね。一方、南の鳥居の天満宮は城山三郎著「落日燃ゆ」でご存知の方もいると思いますが、「石屋の倅から総理大臣へ」と言われた立身出世の典型として誉高かった広田弘毅の子供のときの揮毫です。広田弘毅は外交官から、外相、そして1936年（昭和11年）の二・二六事件後、軍部の発言が強引になり中国戦線が拡大する苦難の時代に総理大臣を務めた政治家でした。

極東裁判では、一切の自己弁護も行わず、文民の身で、ただ一人、A級戦犯として死刑を宣告され巣鴨拘置所で絞首台の露と消えた悲劇の人なのです。幼名、広田丈太郎がわずか7歳（11歳という説もある）の頃、石材職人の父親に命じられて急遽、楷書体で「天満宮」を揮毫したのです。丈太郎は神童の誉れ高い、書の上手な子供で父親は大いに面目を施したのでした。扁額を見上げて恐れ多くもそこから扁額中央の天満宮の書を穴があくほど見つめました。彫刻された陥凹部分も舐めるように観察しました。楷書の天満宮の文字は能筆という評判に違わない上手な書であると深く感じ入りました。小学生の子供が果たしてこのように上手く書けるものなのか？一体、どのような教育を受けたのか？それとも生まれつきの天才なのではないかと大いなる驚嘆と感激を禁じえませんでした。活き活きと伸び伸びとした書など紋切り型の評論などは彼への冒涜以外の何物でもないでしょう。素人は余計な口は開かず、ただ黙して鳥肌が立つ感動の中で小刻みに震えていることに甘んじるしか術はありませんでした。一般に人々は上手いだけの書字を観てもそれほどの感動は味わえないでしょう。昔から「書は人なり」といわれます。感性ある然るべき人が観れば書き人のエネルギーの燃焼や昇華を魂の躍動として共感を覚えることが出来るのでしょう。闊達（かったつ）、流麗（りゅうれい）な美しい書は観る人を上品な雰囲気の中に誘い、優雅な気持や気分を高揚させる効果すらあります。更に書き人に対して敬慕を抱かせる心酔効果、私もこのような美しい字が書きたいという儚い願望すらも抱かせます。従って、誰が、いつ書したかという事は凄く重要な要素なのです。そして石碑の「水鏡神社」も、17歳の広田弘毅による行書体の揮毫も流れるような軽妙な筆致で、これまた、うっとりするような素晴らしい濃淡の大人の書です。誰しも綺麗な字を書きたいと願って努力を重ねますが、誰もが羨まれるような立派な書を書けるわけではありません。習字の稽古（天神様はお習字の神様）が何より重要なのは言うまでもないことですが、魂の正しい鍛え方、正しい活き方、精神力の涵養など修行も平行しなければなりません。才能があるとか、筋が良いとか、天賦の才なる要素、すなわち魂よりもっと人間の深層に存在するであろう、努力では凡そ到達が不可能なDNAの継承が底流に大きく渦まいていることも認めざるをえません。栴檀（せんだん）は双葉より芳し、なのです。

私にもっとも親しいのは将棋駒の書体です。幼稚園の頃、母方の祖父に将棋の手解きを受けました。祖父は田舎初段くらいの棋力で賭け将棋を夜遅くまで楽しんでいたそうです。何でも子供の頃から書字に秀でて明治時代に静岡県令に顕彰されて揮毫書を竹棹の先に挟んで町内をひねり歩いたと語ってくれました。祖父は急戦棒銀という破壊力のある戦法を得意とし「攻めれば三段」の異名も併せ持ち攻めが得意でした。子供ながらに専ら棒銀戦法を真似して遊んでいましたが中学生になる頃、漸く祖父に時には勝つこともあるようになりました。さて、将棋駒の代表的な書体は後水尾天皇の筆跡を基にした錦旗書（きんき）、昇龍斎の書を基にした昇龍書（しょうりゅう）、6世紀末に「将棋駒の銘は水無瀬（みなせ）家の筆

をもって宝とす」といわれた水無瀬兼成の筆跡を基にした水無瀬書（みなせ）や、源兵衛清安書（げんべえきよやす）などに、近代の書家の筆跡を基にした巻菱湖書（まきりょうこ）などが数えられます。駒材は東京都御蔵島産の「島黄楊（しまつげ）」と鹿児島県産の「薩摩黄楊（さつまつげ）」が高級品です。黄楊のどの部分を活用するかで将棋駒の雰囲気や風采は大きく異なります。駒師は最後に王将（または玉将）の駒尻に駒師名を彫り、もう一方には書体名を残します（例えば、掬水作、錦旗書とか。竹風作、昇竜書という具合）。現代の名工や県伝統工芸師と呼ばれる名人級の手による駒は芸術品の域に達する美麗なものでプロの名人戦やタイトル戦などに用いられ珍重されています。41枚の駒（予備の歩兵1枚を含む）を並べてじっくりと鑑賞すると駒師がいかに優れた書家であるかを思い知らされます。絹のような肌理（きめ）の駒肌に軽く隆起し漆を重ね塗りした黒文字はしっくりと馴染み寸分の隙もありません。王将は王将なりに、歩兵は歩兵なりに美しさを競うかのように品よく自己主張をしています。木肌を削って文字を彫り、それを平坦化して、文字の上に更に重ね書きして漆文字を盛り上げる盛り上げ駒は最上級の将棋駒でその製作には2～3ヶ月を要する場合も少なくないそうです。こういう名品を使用して将棋を指せば気持ちは凛として引き締まり、静謐の中に戦意が湧いてくるのは必定でしょう。将棋は別名、手談（しゅだん）ともいわれ、こちらの指し手の次は相手の指し手というように交互に指し手を進め、指を介した談話の意味があります。相手の王将を先に詰ませた（王を殺す）側を勝ちとするゲームです。勝負が終われば勝者と敗者、観戦者を入れて感想戦を行い勝敗の分岐点、攻防の応酬、最善手の検討など、反省点を確認しあい後日の糧とします。常に最善手は何かを自問自答するゲームではじめから終わるまで些かの妥協も許されません。最善手の連続で指し手を進められれば論理的に必勝となるはずなのです。ＡＩ、コンピュータの技術革新でプロの棋士がコンピュータ将棋で敗北するようなこともあり、昔から定石といわれた基本作戦も見直しされるような新しい時代の幕開けでもあります。しかし、将棋の美しさは勝負の勝ち負けだけではありません。もちろんプロの場合、勝つことが最重要ですが、名人戦などタイトル棋戦では対局者は羽織袴の出で立ち、静寂な対局室、盤や駒などの見立て、権威ある立会人など全てに妥協のない優雅な美しさが求められるのは厳粛な伝統的儀式に則っているからなのです。名人が長い伝統の中の人間だから意味があるのです、コンピュータがプロ棋士の名人より強くなっても何の感動も沸きあがらないのです。美しくはないのです。勿論、コンピュータ技術の進化や斯界のイノベーションの努力は評価しますが、それ以上でも、それ以下でもありません。未来学では2045年（シンギュラーポイント）には人工知能が人間の知能を超えるという予測が囁かれますが、それはそれだけの事なのです。特別な感情は湧きませんし美しい日本人の精神、魂とは無縁なのです。美麗な花、達筆・能 厳粛な伝統的棋戦など、日本人の粋な美意識を目の当りにして人々に大きな感動や深い共鳴が生じるのは眠りから覚醒した性善なる魂のエネルギーが自己触媒的に一気に膨張して心の奥底に谺（こだま）するからなのでしょう。